



あの山の彼方



3

小池トミジン

そして、日曜日。朝6時半。

三人は学校の正門前で待ち合わせて出発した。

陽介と翔（かける）はリュックを背負い、草多は古い肩掛けカバンを引っ掛けて来た。

陽介と翔はおやつを用意して来ていた。別に学校の遠足では無いので

300円まで、と決めはしなかったが、親にねだって貰えたのは300円だった。

二人共、親にどこに何しに行くのか？と聞かれて説明したのは

「翔君（陽介君）草多君と遠見山へハイキング」であった。

何故か二人の親達はうれしそうに お弁当まで用意してくれたので、

二人は不思議に思ったが、心配かけないように（中止させられたら嫌だし）本当は怪

しい光を調査するため山へ探検しに行くのだとは言わなかった。

陽介も翔も、草多の家庭については詳しく知らなかった。ただ、お母さんが

一人で苦労しながら草多を育てているらしいと親達から聞いたことがあった。

あまり負担になってはいけないと思い、二人はお菓子の事もお弁当も草多

には言わなかった。この探検のせいで草多が怒られたりしないか心配していたのだ。

しかし、その朝は、普段見たことが無いほど 草多は楽しそうだった。

ときどきスキップまでしている。

今まで起きたことが無いほど朝早く起きたので、陽介はあくびが止まらなかった。

翔は少し緊張しているようで、硬い顔をしている。そんな二人も、草多のはしゃぐ姿で

なんとなく楽しく、上向きな気分になった。

草多は自分が飼っている犬「クロ」（普通の柴犬の雑種で、茶色の犬

だけど、発音しにくいから『クロ』にしたとのこと）の真似をしてみせ、

それが面白くて、陽介も翔もゲラゲラ笑ったのだった。

「家の中からふおと（外）に飛び出ほうとひて、

ジャンプひたら、網戸がひまって（閉まって）たから

『ばいーん』って跳ね返って部屋の中え ゴロゴロ転がったの。

こんなふうに」

サ行の発音がうまくできない草多の話は、ところどころ

聞き取りづらかったが、身振り手振りで

『びっくりした顔で網戸にぶちあたって

部屋に跳ね返ってくる犬の真似』

をしてみせる草多は、学校では見たことがないほど笑わせ上手で、

二人は笑いが止まらなかった。

三人は、なんとなく山を登る舗装された道を上っていった。

車が一台通るのがやっと、ぐらの道幅だ。

しばらくはみんな元気にはしゃぎながら歩いていたが、

途中で道の舗装が途切れ、砂利道になった。

やがて、少し疲れてきたこともあり、三人は少し落ちついてきた。

ふと、思い出して翔（かける）が陽介に聞く。

「陽君、この前さ

タマコ（玉井久利子）達に

聞かれたんだけど」

「何を？」

「あの猫のこと・・・

元気かって」

「えっ・・・・・・・・」

ここでいう、あの猫のことというのは・・・

・・・以前、陽介と翔と あと陽介と同じクラスの誠一の三人で

学校から帰っていたら、子猫がダンボールに二匹入れられて

捨てられているのを発見したのだった。

どうしようか、と三人で相談していると、玉井久利子とめぐみ、千春の三人が通りがかり、

「かわいい——！」と大騒ぎを始めた。

そのうち、めぐみが

「うち、猫飼えるよ！ほしかったんだ！

親に頼んでみる！」

と二匹のうち白猫の方を拾い上げた。

「でも、一度に二匹は無理だから、その一匹は男子が飼ってあげなよ！」

と言われ、陽介達は困惑した。その一瞬の空気を読んだか、タマコが

「あれ？だめなの？？うちの親は絶対怒るけど、

私聞いてみようか？」

と言い出した。そこで、陽介は、慌てて

「いや！大丈夫。俺らが面倒みる。俺も親に聞いてみるよ」

と、言ってしまった。すると、かけるも誠一も調子を合わせて

「そうそう！俺も俺も！」

と声をそろえて言い出した。

男子三人が慌てて変に声を張り上げるので、

女子三人はキョトンとしていたが、

「そう？大丈夫？」

「その子、大事にするのよ」

「ちゃんにご飯あげてね」

などと口々に言い、陽介達は白黒の子猫を三人で

抱えるようにして帰ったのだった。

とりあえず、翔（かける）の家の近くにある拾い空き地の奥の

草むらにダンボールごと隠し、三人でお金を出し合って

魚肉ソーセージを与え、その日は三人とも家に帰った。

しかし、その日の夜。

陽介は親に猫を飼いたい、と言ったら、

「だめ！」と強く反対され、その後は両親とも取り付く島も無く

説得も何もまったくできなかった。

くやしくてくやしくて、部屋で地団駄踏んで、

ちょっと泣いてしまったのだった。

翔も同様に、次の日、学校で涙目で

陽介にそう報告に来た。

誠一にいたっては、恐ろしくて親に聞くことすらできない有様だった。

放課後、三人は子猫の様子を見に行った。

翔が家の冷蔵庫から牛乳を、

陽介はおこずかいの残り全額50円でクッキーを買って持ち寄った。

誠一は一緒に来たものの、もう関わりたくないようで、

「買い物を頼まれてるから」

と言いつしながら申し訳なさそうに帰った。

帰り際、誠一が二人に

「裏切り者だと思わないでほしい」

と何度も何度も念を押すので、

陽介も翔もなんだか気の毒になり

責めたりせず見送った。

クッキーを牛乳でひたしてふやけさせ子猫にやった。

必死でペチャペチャ音を立てながら食べる姿は

一所懸命生きていることが実感されて、とてもかわいかった。

「僕らは飼ってあげられない・・・」

どうしよう・・・」

翔がポツリと言うと、

「どうしよう・・・」

陽介も困り果てた。

二人共涙ぐんでいたが、もうどうしようも無いので、

明日、なるべく前に捨てられていたところからも二人の家からも遠いところに

捨てに行こうということにして、その日は帰った。

その日の夜も次の日も、陽介は気分が重く、心に蓋がされているような
嫌な気分でもごした。

放課後、また翔と連れ立って空き地に向かい、

子猫の入ったダンボールを見て、二人は声を失った・・・・・・・・。

ダンボールに近づくと、

ガサ、・・・・ガサ・・・・、

とかすかな音がする。

嫌な予感がしたが、陽介は恐る恐るふたを開けた。

すると、子猫が手足をつっぱった姿で横たわり、

口から砂を吐きこぼしながら痙攣していた。

「ああっ！」

二人で子猫を抱きかかえたが、もう子猫の目は濁っていて、

心臓の音もかすかにしか感じられなかった。

「どうしよう・・・・！」

「ど、動物病院とか・・・・」

「でも、そんなお金ないよ・・・・」

陽介も翔（かける）も、頭が熱くなり、急に汗をかき始めたが、

頭の中に、対処方法が何も出て来ない。

そうしている間にも、二人の手の中で

子猫の動きが、痙攣が、小さくなくなっていくのがわかる。

「もう、死んじゃうのかな」

「うん・・・・。多分・・・・。」

答えながら、陽介は子猫の口に中の砂を

かき出そうとしてみたが、

砂はずっと奥に、お腹までいっぱい

詰まっているようだ。

「おなかが減りすぎて、

砂を食べちゃったんだ、こいつ」

「僕らがちゃんと

ご飯あげなかったから・・・」

翔は泣きそうだったが、陽介は何故か冷静になっていた。

子猫は最後に少し大きく痙攣し、手足を強くのばすと、

ぐったりとして動かなくなった。

「死んだ・・・」

翔は泣きながら

「僕らが殺したんだ。

僕が殺したんだ・・・。」

とつぶやいていた。

陽介は、ちがう、と言えない。

頭でどう考えても自分達のせいとしか思えなかった。

そのまま、その空き地に穴を掘り、

ダンボールごと埋めて埋葬した。

翔はひどく落ち込んでいた。

陽介はそんな翔を見ながら、

軽々しく慰めたりできないと感じていた。

そして、子猫一匹救えない自分にショックを受けていた。

子供だから、ということでは無い。

子供でもなんとかできるはずだ。

自分という人間に、

子猫を救う力が無かったんだ、と思った。

涙も出なかった。

自分に腹がたったが、二人で子猫の墓に

お祈りし、その日は二人とも

うなだれたまま帰った

翔は、その死なせてしまった子猫のことを

タマコ達に聞かれたのだった。

「それで、なんて答えたの？」

「タマコ達が連れて帰った猫さ、

めぐみの家で今飼ってるんだけど

ものすごく太っててさ」

「へえええ。」

「写真見せられたんだけど、

すごく元気そうだったんだ。

なんか、悔しくて、

僕、つい嘘ついちゃって……」

「え、なんて？」

翔は少しモジモジして、

「うん……。あの子猫は僕の親戚が引き取って

今すごく元気だって……」

陽介は少し面食らったが、考えなおした。

翔もあの子猫に責任を感じて苦しんだはずだ。

「そっか、しょうがないよ。

それでも言わないとあいつら

僕らがひどい人間だって言いふらすかも

しれないし……」

「うん。それも嫌だったから

つい嘘ついちゃったんだけど、

まずかったかな……？」

「ううん。

それでいいと思うよ

あの猫には悪いことしたけどね」

「うん……」

素直に落ち込む翔を見て、陽介は自分より

翔のほうが優しいのだ、と思った。

あの時一緒にいた誠一は、

子猫が死んでしまったことを

こっそり教えると、ほっとした顔で

「陽君のせいじゃないよ。しょうがないよ。」

と笑顔まで見せていたので、

陽介はあきれたが、それ以上何も言えなかった。

自分には誠一を責めたりする資格がないだろう、

と思っただけだった。

草多は、二人の会話をじっと聞いていた。

少し笑顔で。

陽介は草多の笑顔に気づいたが、

その時ちょっと、教科書で見た観音像を思い出した。

山道は段々と細くなり

砂利道から、ただ踏み固められただけの道に変わってきていた。

周りは杉の木々が多くなり、時々ある竹林越しに、朝の太陽が

キラッキラッと輝いていた。

あの山の彼方 3

<http://p.booklog.jp/book/74735>

著者：小池トミジン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tomizin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74735>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74735>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ